



ここ数年、30代で脳梗塞やくも膜下出血に襲われる人の話をよく耳にする。予防策の一つに脳ドックがある。脳や血管に異常が見つかった家族がいることもあり、記者も自分のリスクを知ろうと、30代の終わりに脳ドックを試してみた。

厚生労働省の患者調査（2011年）によると、脳梗塞やくも膜下出血など脳血管を患う患者は全国で約123万人とされる。

脳ドックは、破裂の可能性がある脳動脈のこぶ（瘤）を見つけ、くも膜下出血を防ぐ▽自覚症状のない無症候性脳梗塞を発見する▽認知症リスクを早めに見つける——ことなどで、予防につながるの狙いだ。

国内で最も早く1988年に脳ドックを始めたという医療機関が札幌市厚別区の新さっぽろ脳神経外科病院だ。早速、脳ドックを予約して検査

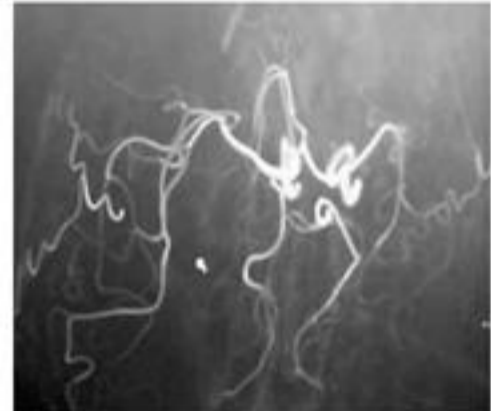
脳ドック受けてみました



を受けた。メニューは、血圧測定や血液検査に加え、磁気共鳴装置で脳の断面と血管の画像を撮影。脳に血液を送る頸動脈の超音波検査（エコー）と心電図検査も行い、認知機能検査に使われる「かなひろいテスト」も受けた。ひらがなだけで書かれた物語の母音を拾いあげながら、話の筋を読み取るものだ。全て終わるまで2時間ほどかかった。

翌日、結果を聞きに行く。端和夫名誉院長（78）が「特に異常はありません」。脳の断面撮影と脳内の大動脈の画像からは梗塞巣や血管病の兆候を探ることができ、血管内のこぶは直径2ミリの程度までわかるという。頸動脈エコーでは、全身の動脈硬化の傾向もわかってくる。画像や検査の数値を丁寧に説明してもらった。

①脳ドックの診断結果を説明する新さっぽろ脳神経外科病院の端和夫名誉院長＝札幌市厚別区②撮影された脳の大動脈の画像



動脈のこぶ、破裂前に

■未破裂の脳動脈瘤の発見率

【年代別】

全体	7.0%
～39歳以下	3.3%
40～49歳	5.3%
50～59歳	7.1%
60～69歳	8.4%
70歳以上	11.7%

※いずれも新さっぽろ脳神経外科病院で1988～2013年に脳ドックを受診した3918人のデータから

【因子別】

全体	7.0%
高血圧症	7.8%
脂質異常症	6.1%
糖尿病	5.5%
喫煙	8.3%
脳卒中（脳梗塞、脳出血）を経験した家族がいる	7.3%
くも膜下出血を起こした家族がいる	11.0%

の血管が狭くなっていた人は4・6%、脳に血液を運ぶ頸部の動脈が狭くなっていた人は5%だった。

破裂していないこぶは、原則として70歳以下で大きさが5ミリ以上、本人や家族がリスクに同意するなどの条件が合えば、手術が可能とされる。そうでない場合は経過観察で、適度な運動や食事の見直しなどの生活習慣の改善を求められるという。

一般的に高血圧や脂質異常、動脈硬化を指摘されている人や、喫煙、大量の飲酒などの生活習慣のある人はリスクが高い。「機会があれば脳ドックを受けてほしい」と端さんは言う。

全国では約600の医療機関で脳ドックが実施されている

ると推測される。メニューや検査結果の患者への返し方などを審査して日本脳ドック学会が認定した施設は4月1日現在で246あり、同学会のウェブサイトで検索できる。

費用は施設により異なるが、新さっぽろ脳神経外科病院は5万4千円。職場によっては検診補助が出る場合もあるが、健康のためとはいえず負担は重い。記者の場合、今後はどのくらいの間隔でドックを受ければよいかを端さんに聞くと、「こぶができてから破裂するまでには5～6年かかります。自覚症状がなければ、次回は5年後以降で構いません」。結果に安心せず、次のドックに向けて健康に気を配る生活をしなければ。

（熊井洋美）